
勇者と魔王は協定を結んだ。

異崎翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者と魔王は協定を結んだ。

【Zマーク】

Z1931Y

【作者名】

異崎翔

【あらすじ】

純粹熱血單純馬鹿な勇者と、体力皆無だが知識は多い爆乳魔王が協定を結び、世界の変革を目指して国を作つたり戦争したりそつでなかつたりな話。

第一部（前書き）

突発的に書いてしまった作品です。
暇つぶし程度にでも読んでくださつたら幸いです。

第一部

酷く美しい、妖艶な容姿を持つ、だがその顔は実年齢よりも幼く見える齢16の少女がいた。

漆黒の長い髪に、全てを見透かしているかのような青い瞳。頬は淡いピンク色をしている。そして形の良い唇。出るところは出て、締まるところはしまっている、まさに女が求める肉体美の持ち主。

どちらかといえば華奢な方だが、年相応の男ならば目の行かないものはないだろ？と予想されるほど、彼女の大きな胸は強い印象をあたえた。

髪と同じく、漆黒のドレスに身を包んだ彼女は、水晶に映る男を見て微笑む。

彼女は魔王だ。

世界を恐怖で支配する、唯一無一の存在。

彼女の視線の先、水晶の中には一人の平凡そうな男がいた。平凡だが、右腰に柄の良い剣をおさめ、胸を張り歩くその姿は堂々たるもの。

表情はきっと引き締まり、前をこれでもかと言つほど見据え、大地を踏みしめ歩行する。

純粹で、正しいと思ったものは絶対貫く、いわゆる熱血。

人間の勝手な解釈を押し付けられ、それでも希望を託してくれた皆に報いようと必死に目的を遂行しようとする、魔王にとつては愚かな生物、勇者。

「もう少しで勇者が来る……」

自分を倒しにくる、つまりは自分の邪魔者でしかない勇者という存在。

だがこの魔王様は、勇者にとても興味があつた。

一刻も早く、勇者にあいたかったのだ。

「うう、寒い」

一瞬、寒々しい視線を感じて、勇者は身震いした。

「誰かが俺の噂でもしてんのかな？」

いくら勇者といえば彼の実年齢は17。その軽い口調と外見を裏切

らぬものだつた。

茶色い、すこし寝癖のついた短髪。170センチいくかどつかの、男性にしては少し小さめの身長。右腰には代々勇者にのみ伝わつてゐるという紋章のついた、美しい剣。

彼は驚くほど良い姿勢で、淡々と歩を進めている。

「着いた……」

彼が見上げる視線の先には、魔王の城と呼ばれる、絶壁の崖の上に立つ高い塔。

周辺にはまがまがしいオーラが放たれている。彼は生唾を飲み下すと、魔王の城に足を踏み入れた。

中に入ると、いつの間にか立ちはだかっていた魔物に目がいく。紫色の、血色の悪そうな肌の色に、細く、つりあがった瞳。醜く歪むその口元から見える、とがつた牙。

「ウッショッショ、人間だ人間！」

美味そうな生肉だぜ！ ヒヤッハーッ」

汚らしい、頭の悪そうな言葉と共に、我が身を投げてくる魔物。それに微動だにせず、彼は。

「ヒエ？」

最後。

魔物は小さな声をもらし、上半身と下半身が真つ二つに切り裂かれ、緑色の血しぶきを噴出しつつ地に倒れ付した。

微動だにせず、ではない。

ただその動きが早すぎて、見えなかつたのである。

彼は魔物が飛びついてきた瞬間、右腰の剣をすばやく抜き、見事としか言いようのない剣術で相手の肉体を真つ二つに斬つた。そして一度ほど剣を上下に振ると、剣についた氣色の悪い緑の血を払い、また剣を鞘に戻したのだ。

どれだけ鍛錬しようと、才の無い者にはできない芸当であった。彼は無残に散つた、大きく目を見開きながら倒れている魔物の肉体を見ると、苦虫を噛み潰したかのような表情をして一言呟く。

「糞つ。魔物のクセに生意氣な

それは先程のような少年らしい口調ではなく、憎悪の対象であるかの「ごとく、低い声で呟かれた。

そして、視線を前に戻すと、また歩き始める。緊張氣味に、だがしつかりと。

それもそのはず。

この先には待ちに待つた、魔王がいるのだから。

人間達を長く苦しめ、それを見下し高らかに笑つているであろう魔王が、突如現れたただの人間でしかない若造に倒される。

それほど滑稽なものは他に無いだろ？

勇者は緊張と、自分が返り討ちに合つかもしれないという不安。

この手で、悪の元凶を滅ぼせるという嬉々とした感情。

魔王の姿を見れるという期待を抱えながら、前を見据える。きっと魔王のことだから、他の魔物たちと比べ数倍大きく、醜く、小汚い性格をした闇の塊のようなものなのだろうと推測する。

彼は小さく深呼吸して、己の感情を閉じ込めるかのように、また歩を進めた。

予想に反して、「うじやうじや」と思われた魔物は少なかつた。罠ではないかと、意識を集中させながら、目の前にある扉を見る。

ほかと比べて豪華な扉。

おそらくこの中に魔王がいるだろ？

またあふれ出しそうになる数々の感情を押し込めるかの「」と、彼は扉を開いた。

が。

「おひの原者よー。やつときたのだなー!?」

目の前に立ちふさがるは、己よりも少し年下くらいの、華奢な少女。彼女は漆黒の衣類に身を包みながら、嬉しそうに駆け寄ってくる。

「間違えました」

勇者は一言言うと、その豪華な扉を勢い良く閉じた。

爆乳美少女を幻覚で見てしまはるほど、俺は欲求不満だったのか……！？

確かに長らく女との縁は無かつたとはいえ、これほどまでに欲の強い男ではなかつたと自負していた。だが、現にあんな少女の幻覚を見てしまつては、顔と肉体の反比例するロリコンワールドへの欲全開ではないか。

彼はその一瞬の出来事に頭を悩ませながら、真の魔王のいるもう部屋を探した。

勇者はその邪悪な欲を振り払つたのよつに頭を左右に振ると、強く頬を叩いた。

「…………つ

もちろん、鍛え上げた自分の腕力に挟みうちで殴られ、痛くないわけがない。

ジーンと赤くなる頬をさすりながら、少し涙目で魔王のいる部屋を探す。

だが、他のどこを探しても魔王らしきものはいなかつた。

いるのは皆雑魚ばかり。

と、そこで。

彼に一つの疑問が浮かぶ。

あの美少女は、魔王に囚われた人間の可愛そうな少女ではないのか？

そもそもこの魔王の城と呼ばれる険悪な塔にあんな人間の女性がいるはずもない。

自分が現れただとで頬を赤く染め、嬉しそうに駆け寄ってきた少女。

「…………つ

己の浅はかさに反吐が出る。

彼女は自分が来るのをずっと待ち望んでいたのだ。

魔王の手から開放され、一刻も早く親元に帰りたいだらう。

自分はなんてことをしてしまったのだと、悔やみながら着た道を急ぎ足に引き返す。

寄つてくる魔物たちをことごとく無視し、やつとのことで戻つてきた豪華な扉の前。

「ぐく、と生睡を飲み干し、扉を空けた。

そこにはやはり先程の、けしからぬ肉体を持った美少女がいる。

彼女はまたもや勇者を見つけると、嬉しそうに駆け寄つてきた。そして、

「やつと戻つてくれたのだな、勇者よ。」

初めて交わした言葉と似たり寄つたりの言葉を口にする。やはり彼女は自分が来るのを待ち望んだ、魔王の被害者なのだ。元気そうなその姿にほつと一息ついていると、彼女は言った。

「よし、勇者よ。

私と手を組まぬか?」

「もちろん」

勇者は即答する。

自分は勇者だ。困っている人を見捨てておけるはずがない。必ず魔王の手から逃がして見せる、と心で決意した。

「本当か!?

それは嬉しいな。てっきり勇者は魔王である私と手など組まぬと思つておつた。

今回の勇者は頭の柔らかい者なのだな

「そんなにほめられると……つて、え？」

魔王は若干小馬鹿にしたような言い草だつたが、勇者はそれには気づかず、意識を彼女の違う言葉へと向けた。

彼女は今、「魔王である私」と言つただろうか？

最近女との縁がなさすぎたのかもしれない。幻聴が聞こえる。彼女は囚われの姫。勇者が助け出すべき大切な存在であるはずだ。そのはずなのだが……。

「今、なんて？」
「頭の柔らかい者なのだな」
「その前」
「今回の勇者は」
「もつと前！」
「魔王である私」

「それだ！」

『魔王にとらわれた私』ではないのか？

彼女はそんな当たり前なことを聞くな、とでもいいたそうな表情で勇者を見つめた。

「ああ、正真正銘、私が現在の魔王だ」

それに、勇者は多大な悲鳴をあげることとなる。

「はああああああー!?

あんたが魔王だと！？ 魔王が女だなんて聞いてないぞっ！
さてはお前、魔王の影武者として操られているんだな？」

ならばすぐにでも開放しなければ。
あひしゃ

そこへ決心する細粒な少年は、右脇に携えている隙を少し触る

それに對して目の前の爆乳美少女は

「お前は馬鹿か？」

とじめの一言を刺した。

「……と勇者が現れ、己の目的のために手を組む」とができると、嬉々としていたのにも関わらず、目の前の魔王に対して現実逃避を働くような男が勇者では、少し頼りない。いや、とても頼りない。

彼女ははあ、と息を吐くと、真直ぐに勇者を見つめた。

そこには、とても緊張の含まれた雰囲気がただよっていた。

魔王が目の前の勇者に殺氣を放ち、それに瞬時に反応した勇者が鍛錬の賜物とでも言えばいいのだろうか、常人にならばその残像を捉えることも難しいほどの速さで、軽く触れていた剣を抜いた。

それを遅れて確認した魔王は、一人で納得したように頷き、少し微笑んだ。

「ほっ。」の殺気に反応するか

？」

魔王が少し不気味に微笑むと、それに勇者は過剰反応する。相手は少女とはいえ、魔王。

この世界に住む人間達を苦しめ、高らかにあざ笑つてゐるよつた魔物の頂点に君臨する者だ。

勇者は決意を固くすると、剣を構える。

「女を手にかけるのは本意ではないが、魔王となれば話は別だ。お前にはここで死んでもいいがつ

それに魔王は、

「あ、ちょっと待て」

駆け出そつとしていた勇者を制止した。それを聞かずしてその首を飛ばしていればあつさりと魔王を討伐できたものを、この勇者は純粋ゆえに、動きを止めてしまう。

「なんだ?」

用が済めばお前を斬る。勇者の由はそつ語つていた。だが魔王は落ち着き払つた表情で一言言つた。

「私はぶつちやけ強くない」

「は?」

「確かに殺氣を放つたり医療系統の魔術を使つたりするのは得意だが、伝説の魔王等のように『一瞬で国を炎の海に!』とか、そういうことは不可能だ。

あと、体力もない。血漫ではないが物心ついたときからこの塔にいるのだ。走ることはないが、長距離を歩いたこともない。

この細腕を見ればわかるであろう

「ひひつ」

そういうて自分の細腕を見せる魔王。と、同時にその胸が揺れ、思春期男子の欲望を強くさせる。

どうにか抑え、確かに血漫にはならないなど、紛らわせるかのよう

に勇者は同意した。

第一部（後書き）

お気に入り登録してくださった方、感想を下さった鍵猫さん、ありがとうございます。

まだ名前が出ていませんが、一話後あたりに出る予定なので、今しばらくお待ち下さい。

「……で。

自分は強くないからと、俺との戦いを放棄するのか？」

魔王のクセに。

最後心に思つた言葉は言わなにことにした。

いや、魔王だからだろ？

魔王だから、小汚い手段を何策も用意しているのかもしれない。
油断したうちにグサリ、なんてことがあってもおかしくない。

高まる緊張を押し隠すように、勇者は魔王を見つめた。
が、対する返答は拍子抜けするものであった。

「いや、実際お前と戦つつもりは毛頭無かつた。

最初に言つたである。よく来ててくれた、私と手を組まないか、と。
私は目的のためにお前の力をかりたいのだ。

そのためならば、私は己の身をお前に売るつもりだ。
目的が済み次第、煮るなり焼くなり強姦するなり、好きにすればいい

い

最後のはいらないのではないか、と一瞬思つたが、彼女の瞳から田
が離せなくなり、思考を止める。

魔王の意志は固い

そう思われるをえなかつた。

彼女の瞳の奥に感じる強い意志。

いくら勇者が鈍い存在だとしても、それくらいの事とはわかつた。だが、

「俺は勇者だ。人間達を救うために、お前を倒さなければいけない」

「そのためならば、私や、魔物たちを殺してもいいと？」

殺す 嫌な言い方をするな、と思いながらも彼は答える。

「必要とあらば」

「魔物も、生きているのだぞ？」

皆が皆、人間の集落を襲つているようなものばかりではない」

「…………しかし、そうしなければ人間はずつと不幸なままだ」

勇者が旅に出る前、勇者となると決意したときに教わった魔物たちの悪事の数々。

自分が勇者でなくとも、どうしても見過せないものがあった。

それに反して魔王は可愛らしい顔をしていながらも、つまらなそうに吐き捨てた。

「ふん。

人間も小さかいまねをする」

肉体と顔が一致しないような外見。

そんな容姿で、彼女は大人びた、少し逆らいがたい何かを感じさせる口調で呟く。

それに勇者の火がついた。

「なんだと……？」

「天賦の才がある純粋な……いや、純粋馬鹿を勇者に選び、魔王を消し去ろうという魂胆か。己の手を汚さずに」

「なに……俺は純粋馬鹿ではない！」

「そこに突っかかってくるのも純粋馬鹿の証拠だ。そもそも、自分が勇者に選ばれるという時点でおかしいとは思わないのか？」

「う……」

魔王の一言に何も言い返せなくなり、ついた火が消されたような気がした。

最初は、なぜ俺が？ とも思った。だが、だんだん話を聞いていくうちに勇者は自分にしかできない大役だと思い、引き受けたのだ。

心中察するかのように魔王が口を開く。

「上手く丸め込まれたか。そういえば、お前は我等を殺しつくさない限り人間は不幸になる、といったな？」

「そりは言つていない」

すかさず反論する勇者に、彼女は間髪入れず続けた。

「似たようなものだ。

ならば問うが、魔物が人間の集落を襲い、人々を殺したらお前はどうする?」

「倒しに行く」

「では、何もしていない魔物を、人間の勝手な都合で大量虐殺されたら?」

「……」

答えられない勇者に、魔王は口角を上げた。

上手い具合に乗せられているとは気づかずに、勇者は下唇を噛む。

「おや。勇者とは正義のヒーローではないのか?
それとも、お前は種別に差別をするのか?」

「違う! 僕はそんなことはしない!」

「そりか、なら」

彼女は不適に笑む。

そして、全てが計算通り、とでも言つたかのような表情で、言つた。

「人間も魔物も幸せにするために、私と手を組まないか？」

それに押された勇者は、答える。

「…………… とりあえず、話を聞こい」

それに魔王は、その顔に似つかない、酷く妖艶な笑みを浮かべた。

第三部（後書き）

次回、魔王と勇者の名前がやっと！
お気に入り登録ありがとうございます。
紅月 空様、vanz様、感想ありがとうございました！

勇者を、とりあえず「話し合」」とこつ状態に落とした魔王は、
言った。

「では、とりあえず自己紹介からといこうか。
いつまでも勇者、魔王と呼び続けていては疲れむ」

その大人びた口調に、勇者は答え、言われたとおりに自己紹介を始める。

「ああ。
俺はハ神・ライトリークだ」

「私はクリフォンス・フレイア。『フレイア様今田もお綺麗ですね』
と言ひながら靴を舐めれば特別に、踏んでやらんこともないが」

死んでもやられよ！ と、ツツ「ミミたい衝動をなんとか勇者は
いや、ライトリークは抑える。

それを察したのか、少し頬を赤らめながらフレイアは一言言った。
「冗談だ」

そして、ライトリークの名に興味を示したのか、問う。

「ハ神？」

「あ。 ああ」

その一言に、目の前の少女が何を問いたいのかが一瞬にしてわかった。

それはライトリークの性格などとは関係なく、今までの生活から悟つたものだった。

「俺は一応、国の十貴族の中の一人、ハ神家の当主の一人息子だ。次期後継者とでも言うべきか」

十貴族とは。

ライトリークの住まう国、レイフォント大国の貴族の中でも多大な権力を握る、十の貴族たちのこと。

十貴族の姓には一から十の数字が必ず入っており、彼らは血縁を最重視している。

血縁を重要視しているとはい、十貴族は名ばかりではない。それぞれ実力を持ち、国の明日の方向へと導くために惜しみなく財力や権力を提供している、実力派の貴族たちだ。

例になるのが、ここにいるハ神・ライトリークという少年。

彼の家は国立から長らく代々国王を支えてきた、剣術を主とする由緒正しき家柄である。

初代は國立に全力を注ぎ、助け、八代目は國の戦乱の危機をその華麗なる剣術で救つたといつ。

他にも数々の実績を挙げてきている。

結果、今では剣術でハ神家の右に出るものはいないとまで言われ、王の信頼も厚いものだ。

現在、当主は21代目、ライトリークの父にあたる。いすれは父も老い、22代目をライトリークが継ぐことになるだろう。

「まう……」

フレイアから、感嘆の息が漏れた。

そもそものはず。

魔王の塔と呼ばれるこの塔に住まう魔物を、立ち向かつた魔物等は低俗とはいえ、一瞬にして倒した男。どこで剣術を訓練したかと思いや、代々伝わるハ神家の後継者だつたとは。

おそらく幼少期より辛い訓練を受けてきたのだろう。

それは、このか弱き少女にも手に取るようにしてわかつた。だが。

「己の素性を簡単に相手に明かすのはどうかと思つが

「う、……」

ライトリーグは彼女の一言に一瞬ひるむ。が、このまま負けては先程の一の舞だと、反論に出た。

「先に自己紹介をすると前に出したのはお前だろ？」「

「別に強制はしていない」

「…………う」

しかしそうさま撃沈。

どうにかして目の前の頭の回転の速い少女を負かせないかと考えるが、彼にはいい策が何一つ思いつかなかつた。話し合いという方向においては。

「次期後継者がこれでは、先が思いやられるな」

「……」

上手くいけば今後の相方となるであろう男には辛い一言をぶつける。

そうなのだ。

あまり頭回転が良くない故、簡単に勇者になれと丸め込まれ、魔王の城に一人でくるなんて馬鹿なことをしてしまつたのだ。

父はきっと、そんな息子をふがいなく思つてゐるに違ひない。これでは後継も危ういかもしれない。

それは、昔から思つていたことでもある。

一時期は勉学に励んだこともあつたが、どうも彼には合わないらしい。

一般的な貴族の知識以上のことを吸収するには無理があつた。

そのせいか、彼は父との訓練時くんれんどき以外でもいつも剣を振り続け、己を剣術一筋で磨いてきた。

彼の今の実力は確かに天賦てんぶの才と、血の滲むような努力あつての賜たま物である。

頭の悪さは彼のコンプレックスの一つであつたが、逆に目の前の少女には嬉しくもあつた。

頭がよければそれはそれで良いと思つてはいたものの、剣術の力がその分劣つていては話にもならない。

頭は自分が補えほつばいい。

彼女の欲するものは、確かな腕の実力であつた。

その実力があると見受けたから、彼女はこうして勇者に話し合いを用い、手を組もうとしている。

己の目的のために。

「では、本題に入ろう。ライトリーク」

少し嬉しそうに言つ少女に、ライトリークが一瞬とは言え、目を奪われたのは不覚だった。

第五部（前書き）

作者に専門知識はあつませんので、いつでも下さる。

そして彼女は妖艶な笑みを浮かべながら、近くにあつたイスに座る。

今まで彼は魔王のことしか見ていなかつたが、少し余裕ができるとあたりを見回した。

踏み心地からしてもかなり高級品だとわかる、トマトジュースのような深紅のカーペットが広い正方形の部屋全体に敷かれている。ずっと眺めていると酔いそうなくらい、目に痛々しく映る。

丁度部屋の真ん中に直径150センチくらいの丸いテーブル。その近くにイスが二つ。一つはすでにフレイアが足を組みながら座っている。

フレイアの奥には、黒いベッド。

浅黒いカーテンのようなものが上から釣り下がり、その中で大きなベッドの上に、端にフリルのついた黒い布団がかけられている。お姫さまベッド、と似たような形状だ。

窓も大きく、その向こうは少しの陸地を過ぎると、深緑の巨大な海が広がっていた。

今更ながら、ほんのりと塩味のする風が流れていることに気づく。なぜ? と、少し首をかしげていると、フレイアが周りをキョロキ

ヨロと見だしたかと思つと首を傾げだした、拳動不審なライトリークといつ男に言つた。

「お前は変態か。

乙女の部屋をじじりと巡回する」

言葉は冷たいが、その顔は少し赤く染まつていた。

「え、ここのお前の部屋なのか！？」

……趣味悪……」

「……で死にたいか？」

「やれるもんなら」

そう言つて、ライトリークは剣に手をかける。
実践なら自分に分がある。

彼女は戦闘において、あまり強くない。いや、弱いといつても過言ではないかもしない。

先ほど自分で言つていたように、彼女からは『戦闘ができます』といつ雰囲気が全くないのだ。

自分が勝てると、そう確信してゐるからこそ強気にでれるのだが。

「お前に殺される前に、私がお前を殺せばいい。

忘れたか？この塔にはもつと強い魔物がうじやうじやといふ。

それに私が医療系統の魔術が得意だとも言つたであらう。

大腿動脈から適当にホルマリンに近い物質を注入すれば、お前は生

きていたれないぞ」

当然のよつて言つフレイアに、ライトリークは首をかしげた。

「…………えつと、悪い。途中から話がわからなくなつた」

「」れだからお前の頭は弱いんだ」

「なんだと？」

ため息交じりに言つフレイアをライトリークはきつと見据える。

「お前それでも貴族だろ？」

少しは勉学に励んだらどうだ」

「励んださ！ 一時期は……」

語尾がだんだんと弱まり、彼女は一度ため息をついた。

そして一から説明してやる、といわんばかり上からの口調で、

「ど」がわからない？」

と聞くものだから、彼は答えた。

「大腿動脈から」

「大腿動脈は、ももの内側を通りている、鉛筆ほどの太さの動脈だ。
……あとは？」

「せぬが……」

「ホルマンではない。ホルマリンだ。

ホルマリンとこつのは商品名で、本当はホルムアルデヒドとこつ化學物質の水溶液だ。

ホルムアルデヒドを約40パーセントほど含んだ水が、ホルマリン。あとは?」

「…………なぜ、それを入れるだけで俺が死ぬ?」

「生体をホルムアルデヒドにつけると、まあ、なんだ。むい」
「…………」
「…………」

「ないか。コレくらい常識だ。覚えておけよ」

「…………」

一瞬押し黙つたが、ライトリーケは頭を抱えながら奇声を上げ、勢い良くその場にしゃがみこんだ。

「わつけわかんねええええええええつ!?
なんだよ、ほるむある……なんたりつて!
知らねえよそんな常識! 聞いたこともないね!」

しかも最後、答えになつてないじやねえか! 馬鹿にしてんのか!

?」

「お前は馬鹿だらつ

間髪いれずに入れる魔王とこの生物に、ライターラークせせりに舌を荒げる。

「つるわーー！」

俺だつて一般常識くらにはきちんと学んだだ！」

「ならば問うが。一般常識ができるなら、お前にしも解けるはずだ。問題、『店で100リットルの物入れを10個買つたら三割引にあまけしてくれた。支払い金額はいくらくらい？』」

「…………ちよつと待て」

彼は抱えた頭をさらに強く抱え、その低レベルな問題に挑む。

（一個100リットルのものを10個買つたから、全部足すと100、200、…………1000だら？
そこから三割引を…………）

「やきたー！」

不意に立ち上がった少年の顔は、満足そうに笑んでいた。
できたことが、相当嬉しかったのだろう。

「答えは、623リットルだーー！」

その答えが正当なものかどうかは置いとくとして。

「ド阿呆。なぜそんな複雑な答えになる。700だ」

「…………っー？」

「そんな、馬鹿な、みたいな表情でこちらを見つめても答えは変わらない。」

「これでわかっただろ？。お前は本物の馬鹿だ」

勝ち誇ったよひと言いつつフレイアは、ライトマークはもう一度頭を抱えた。

そこには、陰から眺めている一人の女がいることを知りずっと。

フレイアはライトリークを馬鹿馬鹿と罵ると、少し満足げに頷く。

「うん、それでこそ勇者だ」

「意味がわからん」

反して彼は、不服そうにフレイアを見つめる。
そして彼の中に疑問が浮かんだ。

「こんな魔王がいて、大丈夫なのか？」

もちろん他者からすれば、こんなのが勇者で大丈夫なのか、といつ
疑問が浮かぶわけだが、あいにく彼にはそれを知る由も無い。
それを幸運とするかどうかは決めがたいことだ。

ライトリークは妖艶な笑みを浮かべる一人の華奢な少女を改めて見
据える。

「で、お前の目的はなんなんだ？」

「ん？」

彼の発した言葉に、彼女は何のことだ？ とでも言ったそうな表情
をする。

「目的に俺の力が必要だから、俺と話し合いたくて言い出したんだ
「ひ」

「あ……ああ、やつだった。話から脱線していて、すっかり忘れて
いたよ」

そういうて、小さく笑むフレイア。

ライトリーケはそんな彼女を見据え、切り出すのを待っていた。

「」で彼が言葉を発し、話をややこしい方向へと導いてしまっては、
また罵られることが目に見えているからである。
それを知つてか知らずか、彼女は再び小さく笑むと、すぐに真剣そ
うな顔つきになつた。

「率直に言おひ」

少しの間をおいて、彼女は言葉を続よつとする。

その少しの間が、ライトリーケには何十秒といつ長い時間にも感じ
た。

ゴクリと生睡を飲み込む。
そして、彼女の口が開く。

「　　私と手を組んで、世界を滅ぼして欲しい」

「…………はあつー。？」

ライトリークは奇妙な声をあげた。あまりにも予想外すぎる言葉だつた。

もちろん彼に、フレイアの目的を予想付けるヒントはほとんど無かつたに等しいが、それにしてもぶつたまげた話だった。

「世界を、滅亡」……？」

「ああ」

「……それがお前の企みなら、俺はお前を倒さなければならぬ」

彼は勇者。

人の生を守るために仲間を経て旅をし 最終的には一人であつたが 魔王の城へと足を運んだ勇敢なる若者。

人の生を守るために活動してきた彼が、世界を滅ぼすなどできるわけが無い。

むしろ世界を滅ぼそうとするものがいれば、その元凶を壊していくぞ勇者。

戦う意思はないと言いながら、自分の前で世界を滅ぼすなどと言つ放つた魔王に、怒りがこみ上げる。

奴は俺を騙したんだ、と。

彼は真直ぐに彼女をにらみながら、腰に携えている剣に手をかけた。

一方、勇者を怒氣させた魔王は、予想通りとでも言つたそな、涼しげな表情で今にも剣を抜きそうな彼を制止する。

「まあ待て。

話を最後まで聞かんか

「なんだ。言い訳なら聞かないぞー。」

「言い訳ではない。言い分を聞けといつていいのだ

どちらも似たようなものなのだが。

「……そつか、それなら聞いてやるわ」

あつやりライトリークは頷いた。

彼が頷くのを分かつて言ったのか否かは、定かではない。

しかしフレイアは満足げに微笑むと、先ほど言おうとしていたでもう一つ言葉を続けた。

「私はな、何もこの世界の生物」と全てを滅ぼすと考へていてるわけではないんだ」

「？」

意味が分からない、という表情をするライトリーク。

その顔からは、『世界滅ぼす』というのは生物も何もかも全てを殺すことではないのか?』という疑問が手に取るように分かった。

「そうだな、言い方を変えよう。世界を再生　いや、変革とこうべきか。

一度この腐った世界に終止符をつけて、新たに世界を作る

「……変革……」

「ああ。

今この世界を眺めてみる。腐りに腐りきっているであろう? 権力者達は私利私欲に財産や兵等を使い生き延びる。それに反して平民達は権力者の気まぐれに振り回され、理由は多々あれど生命を落とす。

犠牲の上に成り立つ、哀れな雑草たちの生き延びる世界だ。

魔物達も、決して平和ではない。小さな幸せすらも、小汚い低俗に潰されているのだ

その言葉には、自然と重みがあった。

幾つものそれらを見てきたような、悲しそうな瞳をする少女。

齡十六の少女が言つ言葉にしては、現実味があり、それと同時に彼にも同意せざる得ない内容も含まれていた。

ライトリーケが魔王の城に来るまでの間、幾重もの町や村、国を見てきたが、幸せそうに暮らしている裕福な土地はわずか一握りしかない。

領主や国王よつてその集落の裕福さが決まるほどだ。権力者達が贅沢をするほど、それに嘆く民がいる。

『犠牲の上に成り立つ哀れな雑草』

それは驚くほどに、今の権力者達の大勢と重なっていた。

第六部（後書き）

だんだん方向性が変わってきたので、タイトルを変えようかと思います。

変えた後も、どうぞよろしくお願いいいたします。

少しの沈黙が彼らの間に流れる。

やがて口を開いたのはライトリーグであつた。

「じゃあ……。その変革をするために、お前は何をするつもりだ?」

「世界を滅ぼすといつただろう?」

「それは聞いた。俺が知りたいのは具体的に何を成すか、と言つことだ」

「…………」

フレイアは少し考え込むようなしぐさをすると、組んでいた足を一度直し、今度は逆に組みなおした。

ライトリーグは黙つて彼女の発する言葉を待つ。

「先程、私は世界に終止符を打つといった。そのためには、私は人間世界の絶対的な勢力と、魔界の最大勢力をうち滅ぼさなければならぬと考へている。

だが、今の私達では最大勢力を倒すには圧倒的な力の差がある。たとえ私が知に優れ、お前が天賦の才に恵まれていようともだ」

今、ちやつかり自慢をしなかつただろうか？

そんな疑問が頭を駆け巡ったが、あえてライトリークは無視することにする。

「故に、まずは私達と共に通の願いを持つ仲間を集めようと思つ。最初はお前の仲間も一緒にこの作戦を決行するつもりだったのだが……」

「どうやらお前は仲間に捨てられたらしい」

ふふっ、と鼻で笑う魔王。

「捨てられたんぢゃない！！　俺の仲間達には……俺よりも優先すべきことがあつたんだ！」

「ほう？　じやあ魔王討伐よりも優先すべきことは頭の悪い勇者を捨て、カジノで遊ぶことか？」

含み笑いをしながらテーブルの上においてあつた水晶を見せてくるフレイア。

それを覗き込むように見ると、金髪の見覚えのある優男のような下種が、女に囲まながら金を賭け、ゲームをしている光景が入ってきた。

「く……っ、フェラルめ……」

そう、彼の名はフェラル。王都を出るとき共に旅を始めた仲間の人だ。

弓矢の達人で、王都の中でも一、二位を争うほどの腕前。別れ際の言葉は『僕は少しここで休憩していくよ。後で追いかける

から、先に行つてくれたまえ』

「あんの女つタラシが……！」

「どうせ見捨てられたのだつ。こんなむさ苦しい集団と見ていて
ライラするほどの勇者には付き合つてられない、とかなんとかで

「ぐつ……そんなはずは無い！……はずだ」

「なんだ。確信も無いのか。安い友情だ。……だが、お前と同じく
らい、気配には敏感そうだ」

そう呟いた瞬間、少し冷たい視線でフェラルが水晶を通してこちら
を向いた。だがそれもほんの一瞬で、本当に自分を映し出す何かに
気づいたのか、それともたまたまだつたのかは分からぬ。

そもそもこの水晶の仕組みすら分かつてはいないので、ライトリー
クにそれが分かるはずもなかつたのだ。

彼は一つ首をかしげると、もう一度水晶にしつる外見優男を見た。

整つた金髪碧眼。一緒に旅をしていたときもそうだったが、彼の女
からの人気度はこちらが羨むどころか、あきれるほどだった。

彼は自分をフェミニストだと評していて、女性には基本的優しい。
そのせいか、戦いになつても相手が性別上物となると、手は出さな
い。少し困った性格の仲間だった。

「さて、と……」

ライトリークが食い入るように水晶を見ていると、フレイアが一言
呟きながら立ち上がつた。

そして視線はずりさず、話していたときよりも少し大きめな声をあげた。

「メリ亞、いるのだね？ そろそろ盗み聞きなんてやめて出てきてはどうだ？」

「……」

フレイアがいふと、ライトリーケがクローゼットの方を見た。ライトリーケは、どうやらメリ亞とよばれた人物の存在に気づいていたらしい。あえて言わなかつたのが、それとも面倒くさかつたのか。

ガタツ、と音を立ててクローゼットが開く。
中から出てきたのは……。

「あら、気づいていらっしゃいましたか？」

女性にしてはわりと高めな身長の、メイド服を着た人。黒髪を上のほうで団子型にまとめていて、笑顔でこちらを見ていた。

「お前はこつも神出鬼没だからな。16年も一緒にいれば嫌でも分かる」

「わつで！」やこしますか」

なんてこと無い会話のよつにして受け流される。
だが、ライトリーケには一つ解せないことがあつた。

（なぜ……クローゼットから出てきたんだ……？ それも、フレイアの服をかぶつて…）

そう。クローゼットはそれなりに広いから、隠れていたといえれば領ける。

だが、出てきたときの彼女は、自分の首もとを黒い服、おしゃらくフレイアの上着だとおもわれるもので覆っていたのだ。それもおもむろに臭いをかいでいる。

「フレイア様。私のことほおきになさりす、続けてください」

「ああ……もとよりそのつむつだ」

普通に、それが当たり前だったかのように話しへ進めようとするフレイア。

「…………」

ライトリーケは田の前の変態のような女性を横田に、なぜシックリ言をしないのかと全力で叫びさりになつた。

「なんだ？ なにか言いたそりだな？」

「言こたへ」とまたさとあるんだがー」

「やうか？ 言つてみる」

「…………」

それができないから困つているんじゃないかなとか言葉を飲み込む。ライトリーケは

(「のメイドは変態か？ なんて聞けるわけないー。）

変人を見るような目でライトリーアがメリアを見つめていると、彼女はその視線に気づいたのか、ニッコリと微笑みかけてきた。

彼

第七部（後書き）

今後も変態が増える予定です（笑）

それにライトリークは苦笑を返す。引きつっていることは承知で。

「何も無いのなら続けるぞ？」

フレイアの言葉に、メリアとライトリークは頷いた。ライトリークの場合、渋々頷いたと言つたほうが合つてゐるだろうが。しかしそんなことには田もくれず、フレイアは一人の同意を確認すると、すぐにでも言葉を続けた。

「まずは同志を募らなければならない。それもより腕利きの者が必要だ。そのために、お前の『元』仲間を、もう一度仲間へと引き戻そうと思つてゐる」

『元』を強調して言つう意味がどこにあるのだろうか、そんなことを考えながらも、ライトリークはフレイアを見る。

確かに、個性が強い奴等だったとは言え、自分の仲間は腕利きばか

りだった。

弓に長けたフェラルもそつだが、他にも魔術、体術等、何かしらに長けた能力を持つ者ばかりが仲間として旅をともにしている。

それはライトリークも重々承知だ。自分の仲間が強い者たちであつたことに変わりは無い。

だが 。。

「なんで一緒にお前と手を組む前提で話が進んでいるんだ！」

「おや？ 組むから話を聞いたのではないのか？」

「違う！ 俺は話を聞くといつただけで、手を組むとは一言も言つていない！」

「開口一番に私と手を組むといつただろ！」

「ぐう……っ」

確かに、言った。

囚われの姫と思い、彼女に駆け寄つたとき。

この女は人の揚げ足ばかり取ると、ライトリークは心の中で毒づいた。

苦虫を噛み潰したかのような表情でフレイアをにらみつけてくると、彼女は冗談だ、と笑つた。

「さすがにそこまで強引に話を進めるつもりはない。だが、手を組む可能性がゼロで無いからこそ、お前は私の話を聞く気になつたのだろう?」

「…………。

一つ、聞かせてくれないか?」

フレイアの問いに答えず、ライトリークは聞いた。

それに「いいだろう」と、彼女は座る大勢を直しながら答える。彼女のそのしぐさを愛おしそうにメリアが見つめていたが、ライトリークはメリアへのツツコミを『無視する』という方法で押さえ込んだ。

「なぜ、お前の作戦に俺が?」

自分で言つのはとても苦しいが、彼は自分の知能を他と比べずとも低いことを理解している。

どこの誰に言いくるめられるかもわからないライトリークを、たとえ剣術が優れていたとしても、わざわざ選んだ意味がわからない。

剣術の名家の子息だといえど、まだ若い。彼ほどの実力者ならばわざわざ王家側の人間でなくとも探せばいる、はずだ。だが、彼女は自分を選んだ。

それは勇者や魔王とは関係が無いのか。

それともたまたま対立しあい、いつかは顔を合わせる運命にあつたからなんとなく選んだのか。

「お前にじてはなかなか質問をするではないか」

「御託はいい。 答える」

「そうだな。 お前が剣術に長けていて、勇者で。 それもかの有名なハ神家の息子だつたから」

やはり、そんな理由か。

ハ神家がレイフォント大国を裏切れば、少なからず国は動搖するだろ？ という魂胆だろう。

所詮、魔王とてその程度の考え方か ライトリーグが内心毒づいていふと、その思考をフレイアが止めた。

「と、思つていたのだが。 どうやらその考えは一部でしかないらしい」

「は？」

「これは今の感情だが、そ、その……どうやら私は、お前のことが心底氣に入つたらしくてな。

その……なんだ……とにかくだ！ お前の天賦の才と私の知能があれば、私の目的が必ずやいい方向へと導かれる氣がしたのだ！！」

言葉をござりせたかと思ひきや、フレイアは突如叫ぶよつとして早口に言つた。

良くわからないが、俺は気に入られたのか？

ライトリークはその程度の考え方でまとめると、フレイアの方を見る。

うつむいていてよくは見えないが、少し赤く染まっている頬。それの原因が暑さでない」とへりいは想像できるだろ？が、

「暑いのか？」

「違う……」

女の経験が皆無に等しい勇者殿には、まだ難しい世界だ。

と、同時に、笑顔だつたメリアの瞳が鋭く光つた。その矛先はもちらん、ライトリークに向いている。笑顔ではあるものの、目が笑っていない。

一瞬寒々しい気配を感じ取つたものの、ライトリークは何かの勘違いだと自分に言い聞かせ、話を戻した。

「そうか。わかつた」

「わかつた……？　お前は私にあそこまで言わせておいて、自分の答えは保留か？　手を組むのか、組まないのか。ハッキリしたらどうだ？」

先とは一変して、攻め立てるような眼差しを向けるフレイア。

困惑するライトリーク。

確かにフレイアの世界変革は今この世界に必要だ。それでもしない限り弱者が延々と惨めな思いをすることとなる。

しかし、自分はレイフォント大団という大きな権力を握る國の人間。それも十貴族という絶対的な王家側の人間だ。國立から代々國を助け、よき方向へと導くために剣術を学び、全身全靈をかけてきたハ神家。その次期当主となるであろう自分が、ここで國を裏切るような行動をとつてもいいのだろうか ライトリークの悩みは深まるばかりだった。

考え込んでから数分、フレイアは真直ぐにこちらを見据え、メリアもこちらを凝視していた。

フレイアは純粹に回答を待つ。だが、メリアは忌々しいものを見るかのごとく痛々しい、冷たい視線を容赦なくぶつけていた。

それもそのはず。

己の愛しい主君がこれだけ懇願したにも関わらず、まだこの勇者は優柔不斷に決断していないのである。

しかし、メリアとて彼がそう安易に決断を下せる立場でないことは承知していた。

「勇者」という立場は押し付けられたものだと前もってフレイアから聞いていたのであまり気にはしていなかつたものの、レイフォント大陸の十貴族の一人、の息子。

レイフォント大国といえば、人間世界でも多大な影響力、権力を持つて いる国。

世界で一番大きいと言われるクレイアント大陸の三分の一の領土をレイフォント大国が占めている。

フレイアの目的に「人間世界の頂点を滅ぼす」という経過は必須。つまり彼は、フレイアと手を組めば頂点の一つとも呼べる自國を自ら敵にまわし、その上足蹴にしなければならないということになる。

だが、今のこの世界が腐っていること自体ライトリーグも思っていたことらしい。

証拠に、今彼は手を組むか否かで相当迷っている。

その様子を真剣に見るフレイア。

「フレイア様、お飲み物など如何でしょうか？」

「あ……いや、今はいい」

「左様でござりますか」

どうやらフレイアは、ライトリーグが決断を下すのを根気強く待つらしげ。

チツ ヒ、メリアは心の中で舌打ちをした。

「本来ならば早く決断して欲しいところなのだが……。急だということは分かっている。一晩時間をやつ。真剣に考えてみてくれ」

フレイアは言つて、メリアにライトリーグの寝る部屋を用意させた。これは城の魔物たちが騒ぐかもしませんね メリアはそんなことを考へるが、素直にフレイアの命に従つた。

用意された、個室。

フレイアの部屋とはうつてかわり、対照的に白いベッドと、灰色の床。あまりつかっていない部屋だったのか、少し埃つぼかつたが窓を開けるとすぐに埃は消えていった。

腰に携えていた剣をベッドの横に立てかけると、ライトリーカークは我が身をベッドに沈ませた。

勇者が魔王の城で寝るなど許されることなのだろうか、と考えるが、今は非常事態。

今までの会話でフレイアが人間消滅を狙つて いるわけでも、世界を支配し私利私欲に命を弄ぼうとしているわけでもないことを知つた。

それに、彼女の目的は先の先にある『平和』だ。
それまでの過程はどうやら一筋縄ではいかなそうだし、惨い血むきが流れることにもなるだろうが。

いや、本当に惨いのは私利私欲に弱きものの命を軽々と摘み取つてしまつ意地汚い権力者達を自由にさせておくことか。

今のレイフォント大団は、強大な力を持つネアリフェイス大団やデイシフエイン帝国と協定を結んで いるだけあり、三大強国と呼ばれている。

それだけ力があるといつゝとは、敵にまわすとともに厄介だということだ。

フレイアがいくら魔王であるつと、レイフォント大団等相手に勝てる勝率が限りなく低い。

それに自分はレイフォント大団に服従して いる一貴族だ。

自國を裏切るような行為が簡単にできるはずが無い。

ライトリーケは悩んだ。

今までのことをたくさん思い出し、迷う。

家のこと。

国のこと。

自分の立場。

一緒に（途中まで）旅をしてきた仲間のこと。
旅の経過のこと。

フレイアと話した数々のこと。

フレイアの目的は大きく、無謀だ。

しかし彼女は人種を超えて弱者にも笑顔を咲かせようとしている。
彼女の言い方は所々横暴だつたが、それでも彼女の瞳には信念がある。

そして、暗い闇がある。

あの年であそこまで世界を変えたがるものなにかそれに関係しているのだろうか。

それはライトリークには分からぬ。

だが、彼女の目的や考えに『間違い』というものは存在しない。
ただ、それが『正解』かと聞かれれば、即座に頷けるものではなかつた。

しかし

。

一晩明けると、フレイア、ライトリーク、メリアの三人はフェラルを仲間にすべく、朝一に塔を出る。

フレイアは最初嬉しそうに頬を染めていたが、やがて元の表情に戻り、それに対してもライトリークはなにかを決意したかのよつた、引き締まつた表情をしていた。

第九部（後書き）

「おおや、第一回がおわりです。お気に入り登録、評価、感想、拍手などありがとうございました！今後もよろしくお願ひいたします！」

ちなみに最後の描写ですが、メリアはもう少し愛おしそうにフレイアを見つめていたと思います（笑）

第十部（前書き）

第一章です！ みなしくお願いいたします。

魔王の城、と呼ばれる禍々しい塔から東の方角にある、ライトリーケの住まうレイフォント国含むクレイアント大陸。その中でも小さい集落と認識されているソレイン村では、決して小さいとはいえない騒動が起きていた。

まず第一に、ソレイン村の領主、ヴィレイスの死亡。

第一に、フェラル・リルチルドといつも」の使い手を先頭にして起きた、反乱。

それらは一度に起きたことではない。

幾つかの月日をかけて、つもりに積もったソレイン村の怒りや憎しみから生まれたことだった。

だが、反乱のきっかけは一人の少女の父の死にあった。

時は少しさかのぼる。

フェラルという男が、ライトリーク含む勇者一行の仲間から外れた日。

この村のヴィレイスという領主は、村の税金を多く取り上げ、苦し
くなつた住人の生活にさらに追い討ちをかけていた。

カジノの導入。

それも、ヴィレイス等を専門とした、豪族のためのもの。
たまに来る他の豪族達。

彼らの懐に入る金の素では全て、村の税なのだ。

ある日村人等の中の代表が、ヴィレイスに言った。

『これ以上は出せない。

税を下げる』

と。

しかしヴィレイスはかまわずに告げた。

『出せるだらう。

税を下げる気は無い。

もしもそれでも税を出せぬと申すならば……、女が惨めな思いをす
ることになるぞ』

この村は小さいだけあって、若い女は少ない。
おそらく、ヴィレイスの言つ『女』とは、彼女のこと指すのだろう。

「カリナ」

金髪碧眼の整つた顔立ちの男、フェラルは言つた。
片手に弓を持ち、背に矢を携え、服を血に濡らし、優しくも悲しそうな笑みを浮かべて。

その声に振り返る女。

美しい……と言つよりは、可愛らしいといふ言葉の似合つ、15、
6の少女。

ずっと泣いていたのか瞳は赤く腫れ、体は小刻みに震えていた。

無理も無い。

己の目の前で、家族が、たつた一人の家族が無残に殺されたのだから。

フェラルの視線の先には、大量の血を腹部から流し、白目をむいて倒れている男の姿。

年は40代後半。

一般人が見れば、すぐにでも気分が悪くなり、吐き出すことが予想付けられる光景だった。

弓の名手といわれてきたフェラルでさえ、目を背けるほどに。

「ふえ、う……つ父様が……つ」

彼女はフュラルの存在を確認すると、小さく嗚咽を漏らした。
目の前の父の姿から目を放さず。

父様、といえど、彼女と目の前で横たわる男に血のつながりは無い。
すでに彼女の両親は死んでいる。

血のつながりは無くとも、彼女にとつてはたつた一人の家族だった。
彼は村を代表して、ヴィレイスに意見したばかりに、最悪の死を迎えた。

彼は一刻程前に『税が出せぬなら女が惨めな思いをするぞ』と告げ
た領主に会いに行き、ヴィレイスの思考に反する言葉を述べた。

娘の身と心を守るために。

しかし、結果的にどちらも彼の手によつて守られることは無かつた。
彼が死ぬことによつて彼女の精神は揺れ、今後どのみちヴィレイス
は彼女に手を出すと思われることから、身も危ういところだ。

フュラルは何も言わずに、カリナといつも愛の女性を抱きしめる。

カリナは声をあげて、一晩中泣き崩れた。

カリナが泣きつかれ、眠りについたとき。

フェラルはカリナの父の遺体を丁寧に土に埋め、それと同時に、人達の堪忍袋の緒が切れた。

魔王の城から東へ向かい、五日目。

ライトリーグ、フレイア、メリアの三人には（夜はしっかりと睡眠と取りつつ）五日間歩いているとのに、疲労の色が見られなかつた。

ライトリーグは旅慣れしているから問題ない。

メリアは未知の能力を秘めている（と、ライトリーグは思つて）いるから良し。

だが、魔王の城から出ず、中でもまともに歩いたことの無い貧弱なフレイアが、どうしてここまで歩けるのだろうか。自分でも体力はないといつていたのに對し、この状況。もしかしたらフレイアよりもライトリーグのほうが疲れているかもしない。

なぜこんな貧弱な魔王が、汗水たらさず初めての旅を継続できるのか。

ライトリーグは納得ができなかつた。

「おい、フレイア」

「ん？」

声をかけるが、余裕そうな表情で返してくるフレイア。それにライトリーケはまゆを動かす。

「なんでお前はくたばっていないんだ？」

「何が言いたい？ 貴様は私がそこら辺でのたれ死ぬような魔王に見えるのか？」

失笑氣味にフレイアが言つと、閻髪いれずにライトリーケは答えた。

「見える」

「ほう……。死にたいか？」

「やれるものなら」

ライトリーケは剣に手をかけ、フレイアは殺氣を放つ。

一瞬で空氣は一変し、ジリジリと痛い霧囲気が流れ出した。それは、常人ならば足がすくみ、動けなくなるほど。

ただ、今、ここに常人という部類に属される生物は存在していない。

彼らの周囲に、大きな風が吹いた。

「と、言いたいところだが

フツと殺氣を消すと、フレイアは足元を指差した。

ライトリークは殺氣が消えたことを確認すると、剣から手を離し、指に沿つて視線を下に向ける。

と、どうだろうか。

彼女の足は地面についておらず、浮遊しているではないか。
彼女はその人並みはずれている魔力で自分の体を地面から浮かし、
体の『体力』というものを使わずに旅をしていたのだ。

もちろん使わるのは体力であつて、普通ならばずっと浮遊してい
る方が疲れるのだ。

魔術を使うにはそれ相応の『魔力』と『精神力』が必要になる。
彼女がいま使つていい魔術は浮遊の魔術だが、これまた高度な技術
がないとできない芸当だ。

魔力を一定の量、一定の場所から放出し続けることで浮き、そりこ
行進と逆の方向に魔力を放出し、地面を押すことで前方に動く。

それをするには強力な、安定した精神力と、多大な魔力。それを使
いこなす技術が必要になる。

だが、魔術に関してあまり知識を持たない彼は、叫ぶよつに言った。

「おまつ！ それはするいぞ！ 僕が旅し始めたときはどれだけ苦
労したと思つてゐる！？」

「そんなこと知るか。いったのであるひつゝ、私は弱い、と。
か弱いフレイアちゃんが一時間も歩き続けられると思つか？」

「…………

「…………なぜ黙る」

一時間も歩く前に倒れていそだから とは、口が裂けても言つてはいけない気がした。
すると二人の会話に割り込むようにメリアは、

「ソレイン村が見えてきましたよ。あそこにフュラル様がいらっしゃると思こます」

綺麗な声で、頬を赤らめながらフレイアに言った。
その視線にただならぬ熱のこもった気配を感じたが、ライトリーグ
は見なかつたことにする。
否、気にしては負けだと言い聞かせる。

しかしフレイアはさも当然と云つたような振る舞いで、そつか、と
答えた。

田の先には、ソレイン村。

一ヶ月ほど前、フュラルと別れた村だ。

この村では少しの間だったが、良くしてもらつていた。

領主とはあまり関わらなかつたが、少なくとも村の人たちは皆親切だつた。

元気にしているだらうか
と思つたとき、信じられない光景が
目に入つてくる。

見間違ひではないか。

これは夢だ。夢であつてほしい。
そう願うが、五感に現実味のある特徴的な感覚が吸い込まれるよう
にして入つてくる。

人の叫び声と、唸り声。

硬い『もの』と『もの』がぶつかり合ひ音。

大きなものが崩され、焼かれる音。

鼻にツーンとくる、異臭。

ライトリーケはすぐさまに走り出した。

目の前で起こつてゐるこの出来事が幻覚であるようにと願つて。
フュラル・リルチルドという男の姿を探し、村に足を踏み入れる。

村に入ると一度目をこすり、辺りを見渡す。

だが、ライトリーケの田の前に突きつけられたのは、酷い現実だつた。

第十一部（後書き）

お気に入り登録等々、ありがとうございました！
感想などござると幸いです。
お待ちしております！

田の前に起きていることは、訓練された兵と、まともに物を武器として握つたことの無つてよくな平民の、殺し合い。

兵はすでに民だということにもお構いなく、向かつてくる敵を殺し、他と戦つている人を背中から殺す。そのたびに苦痛な悲鳴が聞こえ、鈍い、肉の裂けたような嫌な雜音が響く。

ただ、殺されているのは平民だけではなく、兵もまた死んでいく。斧や鎌、クワなどで刺され、引き裂かれ。

剣の機能を 人を殺すための機能を備えていないだけ、攻撃を受けた兵はこの上ない苦痛を味わい、長くにわたつてもがき続ける。誰かが止めを刺さない限り、ずっと。

目の前で死んでいく人たちのほとんどが、顔見知りだつた。この村に滞在したときに、楽しいひとときを過ごした人たち。

彼は呆然と立ち尽くした。
足が震え、体が動かない。

どちらも殺されたくない故に、全力で相手を殺そうとする。自分が生き残るために誰かを蹴落とし、踏み台にする。

本当の、生命をかけた殺し合い。

誰の目を見ても、憎しみの光と、悲しみの光しかライトリークには見出せなかつた。

目の先で、まだ若い男が後ろから殺されそうになる。
助けに行かなければ。

そう思うのに、足が動かない。

それどころか体が硬直し、指一本動かせない。

初めて見る、人と人との殺し合い。

いくら彼が名家の家の生まれだらうと。

いくら彼が幼き日より訓練を積んでいようど。

いくら彼が天賦の才に恵まれていようと。

理論ではなく、感情が。

頭ではなく心が。

彼の言うことを聞いてくれない。

男の背中に振り下ろされようとする剣。

男はそれに気づいているが、到底避けきれない。

男が目を瞑り、死を覚悟した。

(動け。動け。動け。動け。動け！)

何度も念じるのに、体は一向に動いてくれない。

助けられないのか。

自分は何もせずに、目の前の男を、親切にしてくれた人たちを見捨ててゐるのか。

助けなければいけない。

理由がどうであらうと、この殺し合いをとめなければいけない。

そう思うのに、体が動かない。

視線が、今にも剣が背に刺さるうとしている男から離せない。

あ、殺された 　　そう思った瞬間、見覚えのある矢が、兵の腕を貫通した。

銀色の矢。

そんな微妙なものを使つてゐるのは、彼とともに旅をした男以外に考えられない。

矢の飛んできた方向をなんとかたどると、弓を構えた、金髪碧眼の優男のような青年がいた。

放ち終わると、すぐに次の攻撃に移る。

次々に兵の足や腕を打ち抜いていくフェラル・リルチルド。

その素早さはやはり、すごいとしか言えない。

だが、今の彼は憎しみと悲しみの入り混じつた、他の村人たちと同じ瞳をしていた。

この村に、一体何があつたのか。ライトリークは疑問に思つ。

と、そのとき。フェラルの間合いをかいぐぐつて、攻撃を仕掛けてくる兵が一名。

弓矢は中・遠距離には有利だが、近距離には向かない。

気がつけば、震えていた足はフェラルのほうへと歩を進めだし、硬

直していた指は剣を力強く握っていた。

すぐにフェラルの元へと駆け寄り、兵の足首を剣の腹で殴る。

「があ…………ー? ぐ…………あああああああああああああー?」

ありえない音が兵の足首から聞こえ、兵は絶叫とも言える声で叫びだした。

骨が、砕けたのだ。
折れたのではなく、
砕けた。

一見慈悲のように見えて、死ぬことなくこの上ない痛みを味わう相手からすれば最悪の攻撃方法だ。

だが、まだライトリーケは人を殺したことが無い。まだ、その覚悟もできていないのだ。

そんなことをフレイアに知られたら「魔物は殺すくせに」と難癖つけられただろう。

しかしまたテトロークはは人を殺したといふ罪を背負つて生き続けられるほど、強い精神の持ち主ではなかつた。

もう一人の兵の腹部にも、剣の腹で打撃を加える。

肋骨の折れた音と、骨が内臓に突き刺さる音がやたらと聞こえ、兵は声にならない声で叫んだ。

そしてすぐには異物を吐き出し、失神する。

そして最後に、剣の腹で
これは力をかなり抜きながら

「 フルといつ野の頭部を殴つた。

「 い、…？」

ガゴンシ、といつ鈍い音が響くと、フューラルは驚いたよつた表情でライトリークを見る。

「 なににあるんだだい、ライトー！」

「 うわわわーー それはまじめの金髪だこのスケーラムシー！」

「 なつ……ー 真は本当に…… つて、なたでこじこじるーー。」

「 お前を探しに戻つてきただよ」

「 あ……なるほど。じゃあ魔王サマは倒せなかつたのかい？」

「 いや、仲間になつた」

「 くえー……つて、はああああーー？」

一瞬で戦場にそぐわない雰囲気になつたかと思つと、久しづりの再会としては少し（フューラルにとっては）テンジヤラスな会話をする。

「 それより、この状況を説明しろー！ なんで皆が戦つて

え

いいながら辺りをもう一度見渡すと、その場にいる人が、なぜか全員眠っていた。

？」

第十一部（後書き）

殺し合いに「デス・マッチ」とルビをふるかどうかで十分くじけ悩みました。

結果、ルビをふる必要性を感じなかつたので断念。w

感想、評価などお待ちしております！

「え、 なんで？」

「…………？」

フュラルとライトリーカの頭上にはハテナマークが今にも浮かび上
がろうとしている。

突然今まで戦っていた人達が皆眠りについているのだから、 そ
ういった反応も仕方がない。

ただ、 フレイアはそう思つてはくれなかつた。

「ド阿呆！」

「うわ

いつの間にか後ろにいたフレイアが本気でライトリーカの頭を殴る。
そして、 眉間にしわを寄せながらライトリーカに説教をし始めた。

「状況の説明を聞く前に民の戦いを止める馬鹿者が！
お前達が言い合っている間にも死人が増えていくのだぞ！」

「す、すまん」

面食らつたライトリークは、気まずそうに目を逸らす。
確かに、今ここで戦いが進んでいるというのに、フェラルにのんびりと状況を聞いている場合ではなかつた。

一刻も早く戦いを止め、怪我人や死人を減らすことが先決で、状況理解はその後からでも遅くはない。

感情に流されるのはライトリークの悪い癖だ。

と、そこに取り残された人物が一人。
フェラルが物珍しそうにフレイアを見ていた。

「誰だい？」

「俺の仲間。クリフォンス・フレイアだ」

「へえ……ずいぶん可愛らしい女性じゃないか。
初めてまして、フレイアちゃん」

と、キザっぽい笑みと同時に差し出された手を、フレイアは握り返す。

普通に握手を交わす二人。

フェラルもこの女が魔王だなんて、少しも思ってはいないだろ？

「初めまして、フェラル・リルチルド。

ところで、今の状況を説明してもらつてもいいだろ？

「あ……すまない。他の者にはとても言えるような事柄では

「重々承知だ。

というか、大半はすでに知つてているのだがな」

「へ？」

突拍子もない彼女の言葉に、フェラルは声を漏らした。

なぜ、ここにいなかつたはずなのに、知つていると言えるのか。

フェラルの疑問は当然といえる。

フレイアは旅に出た後、夜の時刻など、休憩時に水晶を通してここ
の状況を観察していたのだ。

だが、それを口に出すことはなかつた。

「反乱の理由も、体外は把握している。
聞き方が悪かつたな。

今、ここで戦つている者たちを静める実力がお前にあるのか？」

フレイアの瞳が、鋭く光る。

それは16歳の少女にしてはあまりに重みのある言葉だった。

その一言で、すぐにフュラルは悟る。

この少女は普通に、幸せに過ごしてきた女ではない、と。人のいや、生き物の命の重みをしっかりと理解しているのだ。

意を決したように、フェラルは表情をかえ、言葉を発する。

「僕達は領主の首を取った。

自分達の命の危険がなくなれば、戦う必要もなくなるだろ？

「では、この兵等が静まれば、この村の者達も静まるのだな？」

「へへへ」

「わつか。では、ライトリーク

「へあー？」

突然振られた会話に、素つ頓狂な声をあげるライトリーク。自分には理解しがたいことだと思い、草いじりに行動を移していたせいで手は土だらけだった。

「…………別にするなとは言わないが、もっと周りの言葉に耳を傾

け、状況を把握したりビビだ？

「やうしょうとしたらすでにフレイアが知つていて話を飛ばしたんじゃないか！」

「まあ、否定はしない」

「むづかづくなあ、お前」

無表情で告げるフレイアに、ライトワークは歯をかみ締めた。
言葉では勝てない。

そんなことは魔王の城で十分すぎるほどに理解している。

それ故が、これ以上続けようとはしなかった。

パン、パン、と一度ほど手に持った土を払うと、もう一度フレイアのほうを向き、先ほど言おうとしていたことを問う。

「で？

俺に何をしろって言つんだ？」

「ああ、お前、十貴族だったな。
だったら

「

第十三部（後書き）

今日で2011年が終わり、2012年が始まります。
皆さん今後もよろしくお願ひいたします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1931y/>

勇者と魔王は協定を結んだ。

2011年12月31日16時01分発行